

春夏秋冬

# 台湾徒然



第43回

## 火星のハツカ

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ  
京都市生まれ。99年度「潮賢」ノンフィクション  
部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女た  
ちの聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)  
「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新  
刊に「ノンフィクションの現場を歩く台湾原住  
民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)

台湾は十数もの先住民が存在する多  
民族社会だが、漢人を自認する人の比  
率が98%以上に達することから、やは  
り全体としては漢民族の島ともいえる。

ただ漢民族といえども単純ではない。  
彼らはみな大陸から海峡を横断してこ  
の島にやってきた。二、三百年前、最  
初にきたのは福建省南部の人たち(閩  
南人)で、ついで広東人と呼ばれる人  
たちが渡来した。

台湾で広東人と呼ばれている人たちは、  
正確には広東方面からやってきた  
客家人のことを指している。客家は、  
通常「ハツカ」と発音される。彼らは  
れつきとした中国人ではあるが、特定  
の地域に住んでいるわけではない。定  
住する場所がなかったからこそ、「客」  
という字が当てられたのだ。

彼らは世界各所にいる。東南アジ  
アの華僑の四割は客家だともいわれる。  
米国のロケットが火星についたら、客  
家人が出迎えたという冗談があるほど

いかなる辺境にも彼らの街があり、店  
があるといつてよい。家族の結束は強  
く、勤勉かつ辛抱強い。だからこそ  
近現代史をちよつと見回しても、孫文  
鄧小平、李登輝、李光耀といった英傑  
をアジア中に輩出している。

台湾で、客家は12~15%を占めると  
いう。その本拠地ともいえるのが、本  
島北西部の新竹県であり、彼らの信仰  
とアイデンティティの拠り所となつて  
いるのが、新埔の義民廟である。この  
廟には客家のために戦い亡くなった英  
霊が祭られており、年一回の祭典には  
台湾中の客家が集合するという。

さてこの新埔の町を知ったのは、新  
埔動態博物館という施設を訪ねたのが  
最初である。この民間施設のオーナー  
であり館長は劉邦賢という客家の人  
中に展示されているのは、この一世紀  
人々の暮らしに実際に使用されていた  
雑多な諸道具だ。

三つのフロアがあり、一つのフロ



20年かかって「博物館」を築いた劉邦賢さん夫妻

アがざつと200坪。それだけの敷地  
にすぎまなく「宝物」が堆積している。  
台所の用具もあれば、農機具・ベッド・  
机もある。さらに町で使われていた歴  
代消防車や人力車もずらり。これだけ  
そろつていれば、町がそのまま造れる  
のではと誰しも思うが、劉館長は、そ  
の通り、博物館の地下にかつての台湾  
地方都市の町並みをそっくり再現して  
いるのだ。散髪屋、診療所、葉屋、菓  
子屋、交番などなど、看板から内部の

道具まですべて本物である。

劉さんはこれだけのものを20年かけて  
独力で集めた。ちよつどそのころ、古  
い家が次々に潰されてはアパートやマ  
ンションに変わつていった。土建屋を  
していた劉さん、捨てられていく商売  
道具や家財を「惜しい」と持ち帰つた  
のがきっかけだったという。

劉館長のほか、この新埔で私は不思  
議な人たちに少なからず出会った。台  
湾へ初めてイルカを持ち込み、山の中  
でイルカショーを始めたというおじさ  
ん。十人兄弟みんなが博士になつたと  
いう一家、毎年募参りの日に2000  
人が全島から集まるという御一家の当  
主、いずれも絶倫絶後の人たちがばり  
だ。これらハツカパワーを見ていると、  
火星にはすでに屋台を引いている客家  
人がいるよという噂もまんざら冗談と  
は思えないのである。